

人類研究：論説

著者	太田，重雄
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 4
ページ	1 7 - 2 4
発行年	1901-03-22
URL	http://hdl.handle.net/2298/5083

毛かないのであるか。何故に蟹の足にわ、毛が生えておるか。日本お伽噺わ、面白く之を説明えておる。もえ斯様な例を一一挙げた日にわ、數十頁の紙面を塞いでも足らぬのであれば、茲に唯一つ、適當な例を挙げて、此節の結尾とまて置く。何故に印度の人民にわ、ブラアマナ、ラーシャニヤ、ヴィシャ、スードラの四階級があるのであるか。『リグ、エタ』の有名な『ブルシヤ、スークタ』の詩篇わ、次の説明を下しておる。ブラアマナ即僧侶の階級わ、巨人の口から生じ、ラーシャニヤ即ち軍人の階級わ、其腕から生じ、ヴィシャ即ち商人の階級わ、その腹から生じ、スードラ即ち農夫の階級わ、その足から生じたからである。

人類研究

太田 重雄

マムモス、マストドン等の怪獣は、已に遠く絶滅に歸せ、地表は幾たびか劇變せり、上下茫々數千萬年、而かも此間にありて、依然として、生存を續け、愈久うして益々強大となり、終には他動物を壓倒し、自然界を征服し、萬物の靈長たる地位に達したるものは是れ即ち人類なり。然らば人類とは果えて如何なる大怪物ぞ、學者種々なる方面より是が研究に従事す、

世に一派の學者あり、寒冷なる數理的頭腦を以て、普く自然界の現象、物質界の法則を探究し、即ち説を爲て曰く、宇宙間に實在せ、永遠に不滅なるものは、物質とエネルギーとのみ、天地の現

象や、變轉出沒を極め、一見捕ふる所なきが如しと雖、畢竟エチルギーの變遷に伴ひ、物体の運動も、七十有余の元素が、化合離散する結果に過ぎず。然らば有生界の現象と雖何ぞ此原理にそむくことを得んや、其生物体中に行はるゝ力は、全く無生界に行はるゝエチルギーと同一にして、元來生活現象を經營する生活力の如き、或は不可思議なる靈魂等の存在する理なし。然るを徒らに生命と稱え、靈魂と呼び、人類を以て、一種異様な存在者の如く思考するは、暗愚笑ふ可く、無智の甚きものなり、人類彼何物ぞ、亦之れ自然界の物体のみ、彼れの体力、彼れの腦力、畢竟組織中に含蓄せらるゝ位置のエチルギーが酸化に由り運動のエチルギーとなりたるものゝみ、故に一言すれば人類も亦一種の酸化機械にして、生活は實に酸化作用の一連續に過ぎずと。而して、悉皆の精神作用をも同論法に由て解き去らんとす、

如何にも人類に物質的性質、器械的方面あるは、明かなる事實に於て、此方面より觀察すれば、人類も亦確かに酸化機械たるに相違なき。我に糧を與へよ、然らずんば我れ生活するを得ず、我れ思考するを得ずとは、云ふ迄でもなき事に於て、是れ實に人類が其体中に於て、物質及エチルギーの交換を營み、以て論者の所謂酸化作用を連續せしめつゝある結果に外ならず。而て其食糧たるや、直接に間接に、植物より取るものにして、植物は太陽より來る光線のエチルギーを攝取せ、以て炭酸其他の無機物を分解し、甚だ不安定に於て、且つ酸素に對して、充分なる位置のエチルギーを有する有機物を作るが故に、一旦是を食ひて体中に入れ、同化作用に由て一定時間組織を作りたる後、酸化すれば、太陽のエチルギーは此所に復活し、以て人類生活の原動力となるは實に生理

學上の大原理にまで、身体の構造、器官の配置は、此原理を會得して、初めて解を得るものなり。故に論者の人類觀たる、人類研究に際しては、正確なる科學的根據を與ふるに相違なまど雖、單に此方面のみを觀察して、人類も亦機械なりと放言するに至つては、實に自家の專問を忘却せるのみならず、亦已に論理的矛盾に陥れるなり。

何んとなれば、論者は切りに、人類器械説を主張し、生活力の存在を否定せんとするも、之を爲さんが爲めには、少く共論者自身は、機械以上の存在者にまで、一種靈妙なる思考力を有するものと假定し置かざる可らず、之に反して、若し彼自身も亦全然器械にまで、其腦力の如きも全く化學的エチルギー其物なりとせば、彼は先づ化學的エチルギーが人類器械説の眞理なることを主張する理由を證せざる可らず。之を爲さずして妄りに器械説を主張するは根據なき議論なり、元來極端なる唯物的見解は實際上並に論理上到底成立するを得ず、唯物論中には已に非唯物論的假定あり。人類器械説を主張するは、暗に自己の腦力の器械力以上なるを假定するもの、自己の器械以上なるを假定するは、即ち人類の器械以上なるを假定するものなり之れ論理的矛盾にあらずして何ぞや。故に此派の學説は、人類の客觀的方面は勿論、主觀的方面を研究するには、尙不充分なるをまぬかれず。又一派の學者あり、生物學の原理に由り、進化論上より人類を觀察して曰く、進化は生物界の大法則なり。如何なる動物と雖、現在の形を以て突然地上に創造せられたるにあらず、初めは簡單なるアミューバ的動物より、數億の歳月を経て漸々變異進化を以て現今の複雑なる動物界を爲したるものなり。然らば人類のみ豈獨り造物者の手に由て、特別に創造せられたりとするを得んや、先づ彼

の一般体形は其一動物たるを示し、彼の骨格は脊椎動物の一部たるを證し、筋肉の配置、血管系統、神經系統の分布、呼吸器、排泄器の構造、耳目口鼻の位置及幼兒を哺乳する點は全然哺乳動物的にして、四肢の形態、骨格の工合は猿猴類と密接の關係あるを示す、加之、現今彼には生存上不要にして、甚だ退化しをるにも關らず、初代に於ては、充分發達せまなうと思はるゝ、種々なる部分を、体の内外に認む、即ち盲腸の如き、尾骨の如き、或は外耳の上縁にある小突起の如き是れなり、而して之等は現今或る種の哺乳動物にありては、甚だ能く發達せ、又生存上必要なる部分をなす、然らば人類の祖先も亦初代に於て是等を必要としたるは明かにして、結極哺乳動物の一步進みたるもの、猿猴類の一分派たるや疑を入れず、尙是を發生學上並に病理學上より研究するも人類が哺乳類の一部分たるは明白なり、故に一言すれば、人類も他動物と同じく、アミューバ的單細胞動物の子孫にして、或は靈妙なりと云ひ、或は不可思議なりと稱する精神作用、即ち道德心、社交心、探究心或は想像力、數理性、審美的感情宗教的感情的如きも、決て人類にのみ固有のものにあらずして、元來超然的意味を有するにあらず、發達の程度こそ異れ、下等動物中已に其發芽を認め得べく、唯之等か自然淘汰の理法に由りて、甚えく進化せたるのみ、故に一切高等動物の有する性質及精神作用は自然淘汰に由て下等動物の有する本能の發達進化せたる結果にして、其下等動物の有する本能は、即ち之等の諸動物が種々なる境遇の下に於て、無暗に活動せたる習慣が、遺傳律に由て、漸々子孫に遺傳せ、遂に其動物の先天的本能となりしなり。故に人類の有する高尚複雑なる精神作用も下等動物が、外界に順應せ、生存を續けんとて偶然に得たる一種の習慣より、次第に進化せ

たるものにして、其起原や全く器械的なり、且つ古來より學者の頭腦を苦めたる生命の起源に至つても、實は純然たる化學的作用に歸せ得べき理由あり、何んとなれば、地球は太古に於て、高熱を有えたるが故に、化學的作用も現今よりは遙に活潑なりとは明かにして、即ち一切生物の祖先たる可き細胞が、無機物界より偶然に構造せられしとするも、全く不可能の事にあらざればなり。之に由りて之を見れば、宇宙間に存するものは唯機械的作用のみ、或は不可思議と稱し或は靈妙と呼び何か超然的存在者のあるが如く思意するは、無智無學の甚しきものなりと。

如何にも進化の法則たる、十九世紀學術の一大產物にまで、引力の法則、物質及エテルギー不滅の法則と共に、自然科學の三大原理たり、宜なる哉世の人にして、進化を口にせざれば、學者ならざるか如く思意せ人類學、社會學、宗教學、倫理學、言語學其他の精神科學も之に由て一大變化を起せたるをや、

故に進化論上よりする人類の研究は、殆んど人類の諸方面を説明と同時に其起源、變遷の次第を明かにするを以て、苟も學者たらむ者の輕忽に附す可らざるものなり。然りと雖、進化論亦誤解せられざるにあらず、一旦誤解せらるゝときは、折角の利刀却て學者を過ること大なり。左に少く之を論せんと欲す。

元來進化とは無より有を生ずる意にあらず、無は永遠に無なり、如何に進化律が宇宙を支配するも無きものが有に進化すること能はず。是れ證明を要せざる普通公理なる可き、故に進化とは無より有を造る所の原因にあらず、已に有るものが、如何に變化せ、如何に原始の簡單なる状態より、複

難なる状態に發達分化するかを示す形式に過ぎず。故に進化論は多くの假定の上に立てり、即ち第一、生命を有え、運動力を具へ、刺激に反應え、營養、呼吸、排泄、成長、生殖の諸能力を持つ所の始原細胞の已に地上に存在せたるものと假定え、第二、此細胞たる『或る條件』の下に於ては、漸々進化し、或る時期に達えて、自覺を生じ、形態の發達と共に、精神作用漸く複雑となり、遂に道徳心、探究心、數理性、審美的感情宗教的感情等を有するに至り得べきものたることを假定せざる可らず。之を假定して始めて進化論あり。然るに此假定中二個の大問題あり、第一に於て、生活細胞の起原、第二に於て、『或る條件』の解明之れなり、

説明の便利を計り先づ第二の方面より研究を始めん一派の學者は『或る條件』の解明をなして曰く、元來生物は食物を要す、然るに生物の繁殖すると共に、漸く食物の欠亡を來し、此所に生存競争現れ、適者は生存し不適者は絶滅え、適者は其優等性を子孫に遺傳え、斯くの如くにえて、自然淘汰行れ、生物進化す。故に或る條件は、即ち自然淘汰なりと然るに自然淘汰には適者と不適者との存在を要す、元來同祖先より出でしものが斯く其体に變異を生ずるは何故なるか。或る學者は其原因を外界に歸え、外界異なる時は、夫に對する順應を異にし従て其体中用不用の部を異にするより、之が遺傳の結果生物体に變異を起すと、然り若し其變異の原因にえて、全く外界にありとえ、且つ生物の個体が其生存中に得たる、習慣或は体形の變化が直に子孫に遺傳するものとせば、第二派の學者が主張する如く高等動物の有する諸性質は下等動物の偶然に得たる習慣より遺傳え、同時に發達せたりと云ふ、説もあながち不當なりとは云ふ能はず。若し此事實にえて眞理ならば、人類の有す

る高等複雑なる心理作用も其起源を器械的に説明を得べし、故に第二の所謂「或る條件」の解明は極生物体變異の解明に歸着す、然らば變異の源因は果して外界にあるか。

若しワイスマンの説をして眞理ならしめば、變異の源因は外界にあらずして、生物体自身にあり。

即ちワイスマンの説に由れば、生物体の變異は決て外異より起すにあらずして、其源因は全く体中にあり、外界は已に變異したる生物体に淘汰作用を行ふのみ、又生物体が個体的に受けたる變化或は習慣は通常の場合に於ては遺傳するものにあらずと、而して其体中にありとは、雌雄細胞の合体及生殖細胞内に於けるデ、ルミナントの生存競争之れなり。

今やワイスマンの學説は學者社會の一般に承認する所なれば、一層善良なる學説の生れざる間は、氏の説を以て眞理なりとするも妨げなし、已に然らば生物体變異の源因を外界にありとなさ、個体的に得たる習慣或は變化の子孫に遺傳するとなりたる學説は已に破壊せられたりと云ふ可き、然らば此所に一大問題起る何ぞや人類の有する高尚なる精神作用即ち道德心、數理性等は果して下等動物中に其發芽を有するか、若し有するとせば生物の始源細胞中に已に存せざる可らず然るに道德性等は元來人類以下の動物にありては、生存上必ずしも必要なるものにあらず、然らば例令始源細胞中には存せしと假定するも、此不必要なる性質が數億年の間連續き、劇烈なる自然淘汰に抵抗を得たるは實に奇ならずや、又若し始源細胞中に存せず人類に至つて、現れたとりするか、然らば其原因は如何。

學者或は前述の精神作用即ち道德心、社交心、探究心等の源因を以て社會に歸し、人類が生存上の

必要より社會を組織したることを實に其原因なりと云ふ。然り、社會を組織すれば、分業起りて全体が一の有機的運動をなすに至るが故に、従て、他動物界に於けるが如き孤獨的生活とは異り、大に公共的行爲を必要とするに至り、道德心、社交心、等の發達をうながすは明かなれ共、如何に社會を作りたればとて、全くの非道德的動物が、道德的動物となり得べしとは信ずるを得ず。加之、全然道德の分子なき者は、到底社會を作り、公共的生活をなし得ざるなり、然らば人類の有する高尚複雑なる精神の起因は如何。是れ到底形式のみを教ふる進化論の説明し得ざる所なり。更に第一の假定にかへり、生活細胞の起因を探究せん。一派の學者は其起因を單順なる化學的作用に歸せんとするも、是れ適當なる説明にあらず、若し其細胞として、原形質の一塊たらしめば、論者の説或は然らん。然りと雖運動力、反應力を有し、成長、生殖の機能を備へたる活ける細胞が、無機界より化學的作用に由りて、現れたりとは實に解することを得ざるなり、故に生命の起原に就ても進化論は教ふる所なし、之に至つて吾人は遂に科學の範圍を超越せたり。探究已に此所に至ればメートル法も之を計るに由なく、解剖刀も是を折斷するに功なし、天地悠々とこしなへに沈黙を守り、宇宙茫々徒らに秘密を以て充たさるゝあるのみ。然らば人類は實に大怪物なり、是を自然科學に由てのみ、研究せんとしたる學者は、遂に失敗せざるを得ざりき。人類は到底一個の大ミステリーなり。吾人は唯之が明解を第二十世紀の哲學學に待たんのみ、